

第七十回コスモス賞

猫の巣

福 岡 ありかわちづこ
有川知津子

右の通り贈ることを決定した。

令和五年八月

コスモス短歌会

有川知津子の作品について

有川知津子さんは一九六九年、長崎県生まれ。福岡県福岡市在住。コスモス入会は一九九八年。これまでに「評論賞」「O先生賞」を受賞、本年三月には第一歌集『ボトルシップ』を刊行し、いまもつとも活躍する作者の一人である。

ねばりつくやうなる時化よ残生をあといくたびの渡海か知れず
しんねんのあをい空気を吸ひに出る島のテラスのやうな岬へ
故郷である五島列島の中通島の風土と空気が、心身の呼吸や人生の時間と分かち難くあることがわかる。そしてそこには、幼少期の暮らしの記憶や、家族一人一人のなつかしい佇まいがある。

秋の夜のまぼろしひとつ祖母若くものほし竿を拭うてゐたり
大叔父はからからと逝き玄関に魚籠の置かれるゆふぐれが消ゆ
母にご飯を運んでくれる人をおもふ朝ご飯、昼ご飯、夕ご飯どき
一首目に詠まれた「祖母」は、かつてコスモス会員でいらした

故・前田茅意子さんである。忙しい父母に代わって面倒をみてくれたこの祖母の影響で、作者は短歌の世界に入ったという。島の暮らしを彷彿とさせる大叔父の姿もまた魅力的である。そしていま、年を重ねてひっそりと生きる母への思い。多くを言わないことにより、深い寂しさや思いやりが余情となって伝わる。

この身なら鳥にさらせばすむものを廢炉への途のときはき原子炉
あをぞらを右にひだりに振れてゐる時のふりこの無音恐ろし
孟蘭盆は座敷横切る蟹がゐる蟹はかならずよこぎりはる

「この身なら鳥にさらせばすむものを」という原初的な発想が、下旬の時代批評・文明批評を強く照らし出す。また、不可逆の時間を不思議な身体感覚で捉えた「時のふりこ」。さらに、孟蘭盆の座敷を横切る蟹の存在感。いずれも、独創的でありながら普遍性をもつ秀歌である。満を持しての受賞に拍手を送りたい。

猫の巣

第七十回コスモス賞受賞作品

福岡 有川知津子

雨とあめ絡み合ひつつ落ちゆけりわれの開ける傘のふちより

秋の夜のまぼろしひとつ祖母若くものほし竿を拭うてゐたり

切なかる母をさそひしふたりたび熱帯雨林にふる雨をみた

ふるさとは納戸ひとつを手放してもうすぐ冬のひかりにあふる

群れひとつまた群れひとつ合流しゆふぞらは徐々にひろがりゆけり

長崎の坂をのぼりてくだりたり船の改札まで二時間を

坂の上のなんきんはぜを仰ぎをり浮き棧橋のゆれやすき冬

ねばりつくやうなる時化よ残生をあといくたびの渡海か知れず

しんねんのあをい空気を吸ひに出る島のテラスのやうな岬へ

断崖に太根あらはに根張りつつ椿は冬の海へかしぎぬ

大叔父はからからと逝き玄関に魚籠の置かれるゆふぐれが消ゆ

断崖の冬のつばきのやうなひと唄れた声の大叔父を言へば

この身なら鳥にさらせばすむものを廢炉への途のとほき原子炉

港湾の暗い岸辺にむらがる水母をしまし見て歩きだす

作者感想

十年前に評論賞をもらったとき、「賞はもらってからが大事」と言ってくれた人がありました。今、本賞受賞の連絡を受け、その場面が鮮明に思い出されています。

近くから遠くから、ときには厳しくときには明るく声を掛けてくれる先輩、友人に多く恵まれたコスモス短歌会は、私には大切な小宇宙です。先輩、友人たちにはとても感謝しています。

この賞の選考のために、一年間の私の歌を読み返してくださいました選考委員、編集部の皆様、ありがとうございました。

あをぞらを右にひだりに振れてゐる時のふりこの無音恐ろし
光から風から鐘はかくされて博物館のうすやみのなか

梵鐘のかそけき音の遠白く長塚節歩み去りたり

塔の上の嘴太鴉のぞきをりみづから零すこゑのゆくへを

むかしより春のうしほはやさしくて自転車のベルゆつくり錆びる

会ひたいね、といふときひとはとほくなるもう三年を会つてないので

めだかの子くきく動き最果ての標本木にさくらがひらく

また梅雨のとびらがひらく川沿ひの合歓の木下のシャベルのひかり

とほやまの稜線けぶる梅雨のあさ蜘蛛は音符のごとく垂れたり

猫の巢をみつけたんだよ あゝ梅雨の少年のこゑがどこからかする

母にご飯を運んでくれる人をおもふ朝ご飯、昼ご飯、夕ご飯どき

母のゐない家はわからぬ箱多くこよひの父は敬語をつかふ

盂蘭盆は座敷横切る蟹がゐて蟹はかならずよこぎりをはる

死が先か蟻が先かはしらねどもゆふべの蟬に蟻群がれり

しろもの甘みとおもふ奥津城の盆どうろうの真夜の火あかりほ

西九州新幹線がかへてゆく九州管区の大恋愛図

作者略歴



一九六九年 長崎県生まれ

一九九八年 コスモス短歌会入会

二〇一三年 第三十五回コスモス評論賞受賞

二〇一五年 COCOONの会参加

二〇一九年 『斎藤茂吉研究―詩法における
ニーチエの影響』(花書院) 刊行

二〇二二年 第六十八回〇先生賞受賞

二〇二三年三月 第一歌集『ポトルシップ』
(本阿弥書店) 刊行

五月 福岡県歌人会第一回歌集賞

(優秀歌集賞) 受賞

選考資料抜粋

第七十回コスモス賞の選考は二〇二二年の月集・その一集会員の年間作品を対象として、選者より候補者五名の推薦を求め、小島、高野、影山、桑原、狩野、木畑、大松、田宮、津尾、小山、福士、藤野、風間、田中、橋、水上比、鈴木、原賀、水、上英、大野、松尾の各氏より回答を得、被推薦者は二十名であった。編集部では、その集計をもとに六月十九日編集会を開催して検討し、有川知津子の授賞を決定した。有川作品とともに、岩崎佑太作品も討議の対象となった。ここに、選考資料となった推薦文と推薦作品を整理して掲載する。なお、推薦文は都合により省略したケースもある。

A・

1位 有川知津子

故郷の島を離れて都市に住む学究の日々を詠みつつ、また故郷の親族を思う歌を詠み、自分と故郷との絆が浮かび上がり、現代日本の縮図も仄見える。

2位 金子智佐代

現実在即した詠み方をしながら、見えないものへの視線があつて、奥深い広い世界を感じさせるのが魅力。

3位 伊沢 玲

さまざまな想念の世界を逍遙しながら歌を詠む、という傾向が感じられる。歌は時に思索的、また抒情的で、幅が広い。

4位 吉田美奈子

ものを見る眼差しに優しさがあがり、歌は抒情的で調べもよく、時に童話ふうな味わいのある作品世界を見せる。

5位 四野宮和之

おもに日常卑近な素材を詠み、捉え方が軽快でしばしばユーモアを帯びる。読む者を楽しませてくれる歌人である。

1位 有川知津子

ものの描写力に加えて思索の深さに信頼がおける。すでに自分の文体と世界観を確立させており、一層の活躍が期待される。

2位 中津川勲坐

柔らかく伸びやかな文体が魅力的である。それを活用したウィットに富んだ歌、ふるさとを恋う歌に特長がある。

3位 斎藤 美衣

あふれるものを内面に持っている人という感じがする。家族や仕事といった日常を詠んだ歌でも、心理的な背景に深みがある。

4位 伊沢 玲

B・

ものの捉え方や発想が柔軟で飛翔力がある。日常の中でも詩を捉えようという意志を感じる。

5位 金子智佐代

きっぱりとした詠み口に特長がある。自然を詠んでも人事を詠んでも、その文体を生かす切り取り方に爽快感がある。

1位 有川知津子

家族とふるさとを軸に時間を自在に往還する感覚。端正な文体で現実の細部を見つめ、生きる不可思議を言い当ててくるのが良い。

2位 斎藤 美衣

多忙な生活の中でこぼれ落ちそうなものごと。それを生き生きとした行動を伴って見る姿が印象的。主観と客観の出入りも良い。

3位 四野宮和之

硬質なようで柔軟な文体。物と人の存在感を濃く浮き立たせながら

ら、ユーモラスに真実を突き、自らを晒してゆくのが良い。

4位 片岡 絢

大病を得て改めて見つめる生と死、子供と自分。文体には変わらざる勢いがあり湿気はない中、どこか影があるのも良い。

5位 山田 恵里

教師、母、鑑賞する人、食事を作り食べる人。自分の多面的な姿を描き分けた懐の広さが良い。

1位 有川知津子

都市の暮らしながら、心はつねに故郷五島にある。亡き祖母を想い父母を想う心が作歌の原点になっている。想像をめぐらせる中に生のリアリティを感じさせる。

2位 岩崎 佑太

傷つきやすい青年の心を詠ってきたが、祖父母の介護という現実が歌に更なる深みを加えてきた。

コスモス賞候補推薦・集計と作品抄

☆有川知津子作品……………57点

切なかる母をさそひふたりたび熱帯雨林にふる雨をみた
風渡るこの世の時のほとりにて石のうへなる蜥蜴きらめく
しんねんのあをい空気を吸ひに出る鳥のテラスのやうな岬へ
はじまりがあれば終はりがあるものを咲き継ぐ花はみなちがふ花
光から風から鐘はかくされて博物館のうすやみのなか
母のぬない家はわからぬ箱多くこよひの父は敬語をつかふ
どのやうに空を押しても秋来たり茄子紺色のパジャマを洗ふ
盂蘭盆は座敷横切る蟹がゐる蟹はかならずよこぎりをはる
大叔父はいつも海からあらはれた最後はいとより二匹を提げて
塔の上の嘴太鴉のぞきをりみづから零すこゑのゆくへを
なつぞらを眺めてをりぬ知らぬ地に母をひとりで入院させて
しろもの甘みとおもふ奥津城の盆どうろうの真夜の火あかり
秋の夜のまほろしひとつ祖母若くものほし竿を拭うてゐたり
梵鐘を祖母とあふぎし日のありき観世音寺の春のまひるを
雨とあめ絡み合ひつつ落ちゆけりわれの開ける傘のふちより
叶はざる恋はいくつもあるものを鬼怒川沿ひの露草の花
この身なら鳥にさらせばすむものを廃炉への途のとほき原子炉

☆岩崎 佑太作品……………51点

悪尉の顔をして今宵どこまでも追ひかけてくる十六夜の月
はてしなき介護の日々のはてしなき語るすべなく葉桜の道
「大丈夫、もうすこしだけがんばれます」いひつつわれはわれをあやしむ
炭酸水泡だつごとく梅咲いて先に逝きたるもの幸福
夕刻の金銀の鯉去りしのちわれにのこれる水のリんかく
ゆれやまぬあぢさゐの群れ見つめをりゆるされすぎてわれはひとりきり

本人にとつてはつらいことだが、
歌人としての幅をもたらしした。

3位 吉田美奈子

繊細な歌。ご主人を亡くした悲
しみがそこに加わり、読者を静か
な世界に運んでゆく。

4位 金子智佐代

日常も時事も詠いこなせる力量
は評価されても良い。

5位 伊沢 玲

日常の中から詩をみつけどそ
うとする姿勢に好感がもてる。

1位 岩崎 佑太

静謐な言葉で詩的に詠む。美し
く、優しさと鋭さのある歌は、家
族詠や介護詠を通じて読者の心を
揺さぶる。

2位 杉本 なお

日常を独自の発想で歌にする。
空想と現実のバランスが巧みで、
ユーモアもあり魅力的だ。

3位 齋藤 美衣

発想が個性的で惹かれる。家族
を通して詠まれた日常は、詩的で
のびのびとして、〈今〉を残そう
としている思いが伝わる。

4位 能勢 玉枝

家族や周りの人、植物などに向
ける眼差しがどれも優しく温かい。

おおらかな詠みぶりに好感を持つ。
5位 有川知津子

観察眼が鋭く、日常を丁寧に掬
い取る。定型に詠まれた歌は調べ
が美しく、素材はどこか懐かしく
読者を引込む。

1位 岩崎 佑太

繊細で知的な美しさを持つ歌は
火影に光る絹糸のような静寂を持
つ。その静寂に時に怖さを覚える
こともあるがそれも魅力のひとつ
と言えよう。

2位 水辺 あお

おもしろうてやがてさびしき風
情を持つ歌は強い個性を放ってい
る。筆名から察して現代の狂歌を
目指しているのではとも思わせる。

3位 有川知津子

淡々と流れゆく日々の中にさゆ
らぐ心のつぶやきを丁寧に詠んで
いる。O先生賞の作品も心に残っ
た。

4位 康 哲虎

人生に惑いながらも父を母を妻
を子を詠む歌は底に子として親と
して夫としてのやさしさ、強さを
滲ませた漢の歌。

5位 中津川勤坐

生き物に対するさりげない優し

よく死ぬはよく生きるよりむづかしいかもしれないなく上弦の月

一週間の入所に祖父を送り出すビニール袋とぶ風の朝

暗がりにならぶ能面二十四のどれもいつかのわたくしの顔

秋の夜の永代橋にすれちがふみなひとりづつ雫のごとし

極月の地下道の脇に捨ててある白きマスクと人間の顔

月の夜かたみに覚めてみづを飲む祖父父母は冬の蝶のごとしも

☆中津川勲坐作品..... 38点

理学の眼で物を視つめて文学の眼で情を見るわが立体視

祖父の頬に触れよと言はれふれたとき死とは氷柱と知りぬ七つで

一本の管なるヒトよその何処か括られたなら 命やじゆうとなる

米仏中日露うじやうじや二十余国原発もてり四百余基の

待ちに待ちてホームのガラス戸越しに会ふ叔母の泣き顔あぢさゐにあめ

旧石器時代の恋も照らしたる十五夜の月妻と見てをり

吹雪く日は麻垂のやうな蘆ほうしすぱりとかぶり通学せりき

ヒト奴らがたぬきのくに乗つ取つたやうにプーチン隣国を盗る

露西亞には〈表現の自由〉ありまして偉い人らは虚言をいふ

津南より越後湯沢へかへる道きりのはな咲く花桐の道

☆四野宮和之作品..... 21点

(とんど) 無()ごとしも一般()みとせりお飾りに塩をはらりとかけて

わがならび七軒ありて道白し四軒にある杏子の散りて

大谷がホームラン打てば缶ビール飲みますけふは二本なんです

開けてあるドアよりシニアの愉しげなこゑの聞こえるドイツ語講座

ダイエツトしたことなくてゆるゆるは下着のゴムが伸びただけです

電気、ガス、水道各社のどこよりも電話会社がつながりにくい

問を空けて三度うぐひす鳴きたるをしみじみ聴きぬあからひく朝

部屋を暗くすればそこそこリアルなり大曲よりの火花の映像

☆斎藤 美衣作品..... 21点

尾を丸め眠る夜なり尾の触れる頬と枯野は地つづきならん

さを含んだ歌に心癒された。

1位 岩崎 佑太 G・

さりげない日常詠のなかにも深い思索のあとが見える。他の歌人

から学ぼうという姿勢が感じられる確かな表現の力に身についており、

知と情のバランスがよい。

2位 吉田美奈子

リフレインや対句などを用いて、

軽快なあるいは美しい韻律の歌が多い。日常詠といっても、題材は

広く、対象に向けるまなざしはやさしい。

3位 中津川勲坐

静謐な歌の佇まいに引かれる。故郷津南の歌に漂う哀愁、時事詠

に見る毅然とした意志などにおのずとその生のありようが映し出されて

4位 康 哲虎

職場詠において、私たちの知らない「日常」を切り取って見せてくれる。そこで起きる出来事をユ

ーモラスにあるいはシニカルに表現している。

5位 片岡 絢

仕事に子育てに奮闘しながら、多彩な視点と自由な言葉の斡旋に

より、叙述に陥ることなく、その

世界を読者に感受させる。

1位 中津川勲坐 H・

「理学の眼」と「文学の眼」を併せ持つ視座は壮大かつ繊細であり、ゆたかな歌世界を構築してい

る。その死生観は厳しくも暖かく郷土愛、人間愛に満ちている。

2位 四野宮和之

日常の細部の切り取り方が巧い。表現は軽みや苦みが効いていて、

口語を採りながら自在である。どの歌からも生きることの肯定感があふれ、歌うよるこびを感じる。

3位 薄葉 茂

東北に根をおろし、震災後の人間の営みから眼を背けない。記者

として冷静な眼を保持しつつ、妻への愛、スポーツ愛が温かい。表現は銜いのない直球型が快い。

4位 能勢 玉枝

発想に飛躍があつてのびのびとした詠風。素材は日常にとりながらも、詩的な発想、想像力に満ち

ていて楽しい。口語の取り入れ方も巧みだ。

5位 山田 恵里

教師の歌、母の歌、どちらも深い愛情をそそぎつつ、常に内省的

である。自己を見つめつつも、他

灯一つ机上につけて数へをり五円、十円、明日の暮らしを

こひのぼり雨に湿りておもたさう晴れの日よりも生きものめきて
忘れるといふすこやかさ しつかりとご飯をよそふ湯気たつご飯

浴槽のかたちに四肢を折り曲げてひととき眠るぬるき湯のなか
湯の中でゆれる輪郭いちにちを謝ることに費やした日は

かつてみな選ばれし日のあつたこと道玄坂を行き交ふ傘よ
乗り過ぐすつもりもあつて金曜はこころの端を少しひろげる

☆薄葉 茂作品

18点

そだけに春の兆しがただよへり凍みある闇にひびく球音
コロナ禍の五輪疲れを覚えつつ演出ぎみに新聞つくる

地の揺れにまたも見舞はれ妻とわれひとつの岩となりて固まる
蟬声とドリルの音が交錯しことしも始まる地震の補修

秋深しコロナ、暑さに耐へてきて背後に迫る白き東北
雪が降りウイルスの舞ふこんな夜はとりあへず寝るあしたのために

☆片岡 絢作品

13点

ただひとりの母であること 生きてゆく理由はいまはそれだけでよい
〈青〉は空〈黄〉は麦畑 由来ごと覚える戦争なんかのせゐで

仮に明日われが辞めてもびくりともしない職場の外観を見る
地球には重力がありかなしみは下へ下へと集まるばかり

疲れたるわれにとどめを刺してくるカフエのセリーヌ・ディオンの声が
新築の間取り図を見て子のへやの位置だけ決めてそのチラシ棄つ

☆康 哲虎作品

11点

何色に見えるのだろう空を飛ぶ鳥や虫には空気の色が
牛井とみかんと祖母と妻がいて長女の肺がほがらかになる

永久にとりかえせなくなりました親孝行を先延ばしして
ルンバには負けませんので雑巾を固く絞って四つ這いになる

「生まれつきの日本人です」なぜ僕にそんな自己紹介をするんだ
妻と子に内緒で少し上げてきた私が死ぬともらえるお金

者や世界へ目がひらかれているか
らだろう。歌に深みがある。

I・

1位 中津川勤坐

理系の緻密さがある。時代社会
を見る目が鋭い。家族詠を中心と
する日常詠は、肩の力を抜いてい
てほのぼのとした味わいがある。

故郷・新潟に寄せる思いは熱い。

2位 岩崎 佑太

三十歳の大学院生。学業のほか
に祖父の介護を担っていて、作
品からは苦悩する様子がうかがえ
る。思索性を感じさせる抑制の効
いた歌柄で、言葉に緩みがない。

3位 斎藤 美衣

事業を経営しながら、育ち盛り
の子を育てる母。クレーム対応な
どストレスがあるようだ。中年女
性のアンニュイな情感を、陰翳豊
かに表現する。

4位 四野宮和之

現役時代は都心で勤務していた
という。七十年代半ばだが、発想が
若々しく柔軟である。暮らしの中
で気づいたことを率直に、軽妙に、
ときにユーモラスに表現する。

5位 有川知津子

離れて暮らすふると（長崎県
の島）への思いが強い。海をはじ

めとする自然、父母、祖母への思
いが歌の源泉になっているようだ。
詩への昇華の度合いが高い。

J・

1位 中津川勤坐

幅広い素材をカバーしてひょう
ひようと、時に思い切った切り口
でとらえる姿勢には、詩ごころが
見て取れる。

2位 四野宮和之

身の回りのちよつとした違和感
を見つけ出し、それを微妙な言葉
遣いに載せて、ややユーモラスに
歌っている。

3位 有川知津子

おおね控えめな表現が主体と
なっているが、そこには短歌形式
へのしつかりとした信頼感がうか
がわれる。

4位 薄葉 茂

落ち着いた静かな調べの中に、
日々を過ごしている東北の地への
深ぶかとした思いが色濃く行き渡
っている。

5位 能勢 玉枝

引き締まった言葉の運びを生か
しながら、家族をはじめとする周
囲のものたちを的確に愛情を持つ
て描き出している。

K・

☆能勢 玉枝作品……………10点

わたしにもいろいろありて、早いなあ八つ手の花の宇宙が咲く
怪しげな令和四年の敷原に今し入りゆくわたし寅です

わたなかはわがが帰ってゆくとこころハンマーヘッドシヤークが泳ぐ
勢ひがたいせつなれば勢ひで穿いてもみむか破れジーンズ

火を使ふことのあらざる日のありて電気ポットに湯の沸く音す

☆水辺 あお作品……………9点

まつすぐに降る雨やさしなにもせぬ一日まるごと夕闇に入る

口笛もハモニカも下手 手拍子で人に合はせて六十年余

人が好きで角を出したるカタツムリかるくつつかれ殻に籠りぬ

風呂敷を持たなくなりて衰へぬ異形のを包むやさしさ

平等と公平めざす今世紀性差を均す、貧富均さず

☆杉本 なお作品……………9点

たんぼほの綿毛ほどなるしらすぎを望遠鏡に手繰りよせたり

新緑の木々とうつぎの花の白 春の峠をゆつくりと越ゆ

少しなら踏みはづしても良ささうな道なりけふはくちなし香る

イモムシのやうにあなたの靴下が歩む夢なり夢でよかつた

答へたくありませんとは言へなくて年齢を言ふまでの数秒

☆山田 恵里作品……………9点

学校に閉ざされて我が一生あり寒天質のごとき夕ぐれ

新郎は新婦の角煮が好きと言ふ 母の知らない娘の角煮

「私」引く「仕事・子ども」はゼロになるゼロになるのが怖くて甘い

雪を受け半眼になる信号機うつすらあを世を見下ろせり

☆伊沢 玲作品……………9点

わたしならしやがんでしまふ三日三晩雨に打たれて立つプラタナス

知らぬ間に期限の切れしポイントのごと核兵器朽ちてくれぬか

新婚の子の節約は砂のやま値上げの波が何度もさらふ

〔正常化バイアス〕強き夫とわれ「平気、平気」とお茶ばかり飲む

1位 薄葉 茂

スポーツ記者としてスポーツに
注ぐ眼差し、東日本大震災被災者
として世界を憂う眼差し、その

どれもがしみじみと胸を打つ。時
にユーモラスで、そこもいい。

2位 有川知津子

やわらかな言葉と韻律で詠まれ
た作品は、この世にありながら異
界を垣間見ているかのような不可

思議な世界に導いてくれる。

3位 中津川勲坐

エンジニアの視線で日常を掬い
つつ、抒情を忘れない詠風。妻を
詠んだ作品は温かく人間味にあふ

れている。

4位 島本ちひろ

何でもない風景を詩に昇華でき
る人。作品に詠まれた子どもと作
者の距離感が独特で、新しい育児

短歌の世界を展いている。

5位 杉本 なお

言葉に負荷をかけず、平明にゆ
つたりした韻律で詠む。用言の使
い方に個性があり、作品を魅力的

にしている。

1位 康 哲虎

日々の暮らしを全方位から観察
し、ユーモアに包み込んで作品化

する。そこにウイットを潜ませる。
社会の不具合への批判をにじませ
ることを忘れない。

2位 薄葉 茂

社会を厳しく見つめる目に鋭さ
が宿る。切れよくそれを作品化す
る。幻の声を聴き、手の平に広げ
て見せる技術がある。叙景歌にも
力を発揮する。

3位 山田 恵里

オノマトベを巧みに活用し、物
を叙景を切り取る技がある。人と
人との繋がりを心地よいものとし

て詠むのがいい。家族を暖かく詠
む歌に魅力がある。

4位 尾崎 潤子

からつとした歌柄ながら、抒情
を感じさせるのがたくみだ。リフ
レインの効果を知っている。オ

ノマトベに力を発揮する。会話体
の生かし方を心得ている。

5位 北 祐二郎

背景の設定が適切で、抒情を生
む力になっている。想像力が豊か
で飛躍力がある。叙景からのイメ

ージを自分の感性で自分の言葉で
掲げ上げ巧みに具象化する。

1位 水辺 あお

現代社会に対して問題意識を持

持

持

持

持

持

持

持

持

持

持

持

持

☆尾崎 潤子作品……………6点

をさなごが「もも」と言ふときすはめたる口はちひさな言葉のつぼみ
花束をもらふこちす「歳児のうたふ」「ハッピーパーティー ばあば」
歩き方しつかりとしてをさなごがずんがずんがと来る夏のあさ

☆吉田美奈子作品……………6点

みんなみへ間なく帰らむ力溜め当歳つばめは風に抗ふ
吹き上ぐる川風に声たわめられ蟬時雨濃く淡く響けり
穂のぞく稲田の上に秋津群れ光の網なす夕陽を浴びて

☆金子智佐代作品……………6点

コロナ禍の会へない時間が育てたる十八キロは抱き上げられず
何光年もかけて愛さう大いなるリボンを着けて生れたるいのち
七七日に向かふ磐越道は雨 天の怒りのごときどしやぶり

☆島本ちひろ作品……………2点

泉から吹く風海から吹く風と出会って街を吹く風となる
職業欄「無職」を選ぶ一瞬に指は烈しく狼狽えている
花の名をそうは知らずに生きているそれでも君は分かるよ

☆三沢 左右作品……………2点

金原亭馬生が高座に着くやうなあゆみで雨がちかづいてくる
つまらなき本は二日でおもしろき本は四日で読みをへて、梅雨
コーヒーのしづくに大き氷割れ薄暮の原子力発電所

☆北 祐二郎作品……………1点

仄青きバズルのピース海だらうと思ひて置けば空のはじまり
風が押す、運ぶ、奏でる、掃く、回す 風たるけふは風の休日
われ一人の夜の食卓ひと房のあはきみどりのぶだうが光る

☆浦部 晶夫作品……………1点

週日は白衣を着るを習ひとし半世紀過ぎぬ臨床樂し
朝早く研究室に通ひにし東大病院なつかしきかな
鑑三の強き言葉を読みゆきて不屈の意志を学ばむとする

ち続け、庶民の思いを代弁する。

叙情性のある作、深い思索を感じさせる作、風刺の効いた作をマクロナ視点とミクロナ視点で捉える。通底しているものは人間性への深い理解である。主題の幅の広さと感性の豊かさが魅力。

2位 中津川勲坐

日常的な事柄をよく見つめ、独自の視点で捉え、深い思考が醸成された作品には説得力がある。作品の中に作者の人間性の豊かさが感じられる。

3位 有川知津子

自然や事物を見つめながらそこに人間の生の有様を見ている。家族への視線も作者独自のものがあり、こまやかな愛情を感じさせる。

4位 康 哲虎

社会の諸相に対して飾ることのない批評眼が新鮮。心のやわらかさと素直さがよい作品を生む源泉である。

5位 齋藤 美衣

日々生きる心と命を大切にしながら作歌に励む様子が作品から伝わる。発想と着眼の若々しさが魅力。

1位 片岡 絢

独り、子供と生きる道を選んだ作者。仕事や子育ての負荷を負いつつ、父の老いも戦争のことも気になる。そういう日々の思いを、確実に、伝える歌である。

2位 有川知津子

親族や故郷への愛を根底に、静かで、やわらかい目差の作品質だ。事物の歌には愛と知識の裏打があり、気がつけば、独自の歌の世界を築いていた人である。

3位 岩崎 佑太

三年目の介護生活の苦を詠む時も、詩歌となる力量を持つ人だ。日常そのものが詩の中にあると見えるほどだが、特に、固有名詞の生かし方に秀れている。

4位 尾崎 潤子

喜びも心配もたらす家族たち。温かい距離感で見守りながら、作者は、その奥に人生を見、世界を見ている。落ち着いた的確な表現で、静かに歌を詠む人である。

5位 金子智佐代

何事にも興味を持ち、時をかけて見つめ、詠うべきを詠う、そういう質の詠い手だ。言葉に重量感があるのも特徴で、思いの嵩の大きい人なのだろう。